

アウグスティヌスにおける 被造的善の理解について

菊 地 伸 二

序

アウグスティヌスによればこの世界に存在するものはすべて善である。ここでいう存在するものとは神によって個々に造られた被造物を意味しているから、アウグスティヌスの善の問題を考える際この世界にある個々の被造物はすべて善であるという立場がさしずめ我々の出発点となる¹⁾。

ところで善であると一口に言ってもすべてが同じように善いわけではなくむしろあるものは他のものよりも一層善く又別のあるものは別の他のものほど善くないといった具合である。ではそれにもかかわらずこれらがすべて善であるといわれるのは如何にしてか。又すべてが善であるならば悪は存在しないことになるが、この世にはびこる悪はこのことを正面から否定するのではないのか。上の立場を出発点とするとたちまちこれらの疑問が生じてくる。ではアウグスティヌスがすべての被造物は善であるというとき、善であること、又は善とはそもそもどのように理解されているのであろうか。そこでこの小論では特に『善の本性』(De natura boni) を中心にアウグスティヌスが被造物の善を如何に捉えていたのかを明らかにすることによって上記の疑問に答えたいと思う²⁾。

1

『善の本性』において被造物の善はこれを存在せしめている創造主との関係で次のようにいわれている。「すべての善は最高善ではないが最高善に近い善も、さらに最高善からはるか隔っている最も低い善も、最高善そのものによらなければ存在しない³⁾。ここでいう最高善とは創造主なる神のことであるが、神がこのようにいわれ

るのは如何にしてか、それは端的に神が不変的な善であることによる。これは被造物が無から造られたということによって可変的な善であるのと対照をなしているが、このことから神が最高といわれるのは連続したもののあたかも一番上にあるという意味においてではなくむしろすべての被造物を質的に越えているという意味においてであることが窺い知れる。またすべての被造物は上の引用の箇所より相互の間にさまざまな段階があることが推測される。ではそれらの間に違いがあるにもかかわらず同じく善といわれるのは如何にしてか。すべての被造物に共通している善の捉え方とは如何なるものなのか。これについては被造物が一般共通に有している善として限度 (modus)・形象 (species)・秩序 (ordo) の三つがあげられ次のようにいわれる。「これら三つのものが大きく与えられるだけより大きな善が存在し、これらが小さく与えられるだけより小さな善が存在する。三つのものがない場合にはいかなる善も存在しない」⁴⁾。

この叙述から我々は可変的な被造物の善はすべて共通に限度・形象・秩序の三つによって規定されること、又これら三者はどの被造物にも共通して見い出されるだけでなく、被造物の善を根底から規定する重要な役割を担っていること、さらにこれらは相互に切り離すことの出来ない密接な関係を有していることを知ることが出来る。それでは限度・形象・秩序とは一体何を意味しているのか。またこれら三者は互いにどのような関係にあるのか。そこで被造物の善が限度・形象・秩序に即して創造主との関連で述べられているテキストをとりあげこれら三者の各々の意味及び三者の関係を探ることにしよう。

II

限度・形象・秩序が創造主との関連でとりあげられているのは『創世記逐語解』第4巻である⁵⁾。すなわちここでは『智恵の書』11・21《あなたはすべてのものを尺度と数と重さのうちに調べ給うた》をめぐる解釈がなされており、その中で尺度 (mensura)、数 (numerus)、重さ (pondus) が各々限度、形象、秩序に対応していることがいわれる⁶⁾。具体的には尺度はすべてのものに限度を規定することによってすべてのものを限定し、数はすべてのものに形象を与えることによってすべてのものを形づくり、重さはすべてのものを休息・安定へと引くことによってすべてのものを秩序づけるのである。このことから尺度・数・重さは各々すべてのものを限定し形づくり秩

序づける神の働きを示し⁷⁾、他方被造物はその神の働きによって限定され形づくられ秩序づけられているものとして限度・形象・秩序を有しているのである⁸⁾。ところで尺度・数・重さは第一義的には神の働きを意味しているが被造物が有するものとしてもまた用いられている。そしてこの場合尺度・数・重さは限度・形象・秩序と互いに置きかえられるほどに近い意味を有しているといつてさしつかえないであろう。

しかしながら尺度と限度、数と形象、重さと秩序は具体的に如何にして置きかえられるものとしてあるのだろうか。これについてはさしあたって次のように説明出来るだろう。

まず被造物が尺度を有するとは、それが尺度によって測定され限定されることであり、そのことによって被造物は限度を有しているのであると⁹⁾。次に被造物が数を有するとは、それは数えられたものとして他のものからいわば区別されたものとしてあるのであり、その被造物は他のものから区別されるところの固有の形、形象を有しているのであると¹⁰⁾。最後に被造物が重さを有するとは、それが量られる際にそのものの重さによって傾きを示しながらそのとどまる所、場所に向かっていくのであり、かくしてその被造物は休息・安定へと向かう傾き、秩序を有しているのである¹¹⁾と。限度、形象、秩序を以上のように各々尺度、数、重さととの対応でみることによりこれら三者の意味を我々は凡そ次のように理解することが出来る。まず限度は被造物が神によって限定されてあることを示しているから被造物の有限性を意味している。またそのような仕方では被造物が存在していることを示しているから被造物の存在性をも意味していると。

次に形象は被造物が神によって数えられるという仕方では他の被造物から区別されたものとしてあることから被造物の固有性を意味している。またそのような仕方では被造物が知られていることを示しているから被造物の可認識性をも意味していると。最後に秩序は被造物が神によって量られることによって各々の安定するところへと向かうことを示しているから被造物の志向性を意味している。またそのような仕方では被造物が全体の中で各々与えられた場所に割りあてられることを示しているから被造物の全体性をも意味していると。

この全体性については後で再びみることにしよう。

それでは被造物の善を規定するこれら三者、すなわち限度・形象・秩序の相互の関係についてはどうであろうか。これら三者がともだった仕方ではいわれていることから

相互に密接な関係をしていることは既に指摘されたとおりであるが、さらに進めてこれら三者は相互の間に何ら優劣もなく対等な関係にあるとはいえないであろうか。しかしこれに対しては三者は必ずしも対等ではないと思われるテキストをあげる事が出来る。例えば『善の本性』では次のようにいわれている。「自然本性的な限度と形象によってよりすぐれた仕方で秩序づけられたある本性は、たとえ壊敗していても、より小さな限度と形象によってより劣った仕方で秩序づけられた壊敗していない他のものよりすぐれている」¹²⁾。今ここで注意したいのは本性が限度と形象によって秩序づけられるという表現である。この表現に従うならば限度及び形象は単に秩序と区別されるだけでなく、限度によって秩序づけられる、形象によって秩序づけられるという表現にみられるごとくこれらもまた一種の秩序としてつまり秩序に含まれるものとして解されているように思われる。このようにみるならばこれら三者は対等な関係にあるのではなく、むしろ限度と形象とは同等であるが秩序はこれら二者を包含するものとしてより高次の資格を有するものなのではなからうか。しかしもし秩序の実質的な内容が限度と形象であるならばかえって秩序の独自の意味は失われることにはならないか。それとも秩序には限度と形象をその内容とする場合と休息・安定へと向かっていくことを意味する場合の二通りがあるのだろうか。しかし結論からいうならば秩序とは常に休息・安定へと向かう志向性を意味している。そこで上の疑問に対しては次のように答えることが出来るだろう。すなわち限度と形象によって秩序づけられるとは、秩序が限度と形象の二つをその内容とするというような意味ではなく、むしろあるものが限度と形象を有していることが同時に秩序づけられていることを意味するのである。実際これら三者は被造物のうちに時間的継起の中で順次見い出されるようなものではなく、またここからここまでが限度、ここからここまでが形象という具合に被造物のうちに分離されて見い出されるものでもなく、むしろこれらは被造物のうちに同時的にかつ常にともだった仕方で見い出されるのである。以上のことからこれら三者はそのいずれかが他のものより高次の資格を有していたり、又そのあるものが他のあるものに含まれるというような仕方に関係しているのではなくその意味でこれら三者は対等関係にあるといえるのである。

しかし疑問として残るのは、被造物の限度、形象を有することが同時に秩序づけられることになるという表現にみられるごとく、秩序と限度・形象との間にはやはり異質なものが介在しているのではなからうかという点である。実際被造物において形象

と限度とは、被造物の形象を有することが即そのような形象を受けとることの出来るものとして限定されていることを示しているように¹³⁾、ちょうど一枚の紙の裏と表のような関係にあるといえる。

しかしながらこのような関係は秩序と限度或いは秩序と形象との間には成り立たないように思われる。またアウグスティヌスのテキストにおいて被造物の存在が神から形を受けとることに即して説明される箇所、すなわち存在するとは形象を受けとることであることが示される所も見出されるのである¹⁴⁾。このように考えてみると、これら三者は確かに同時的にかつ分離しがたい仕方に対等関係にあるものの秩序は他の二者とは異質的なある面を有しているといわなくてはならない。また一般に存在するものが形象を受けとることによって示されうることを併せて考えるならば、秩序がそこに付加されることの意味、つまり何故二者ではなく三者によって善を捉えるかということが逆に問われてくるのではなかろうか。しかしその前に限度・形象・秩序の三者によって捉えられた被造物の善を今少し浮きばりにしておきたい。

III

そこで先に触れた秩序の全体性ということに再び注目してみることにしよう。

ところで『創世記逐語解』ではすべての被造物を表わす *omnia* はまた *universa natura* ともいわれている¹⁵⁾。 *universus* という語は頑来 *unus + versus*、すなわち一に向かうという意味を有していることから、被造界にあるすべての被造物は全体としてあるまとまりをもったものであることが察しられる。また『マニ教徒に対する創世記註解』では『創世記』1・31《神が造ったすべてのものをみられたところそれらははなはだよかった》という箇所をめぐって、何故1日1日の御業の後によしとされているにもかかわらずすべての御業が完了した後改めてことさらにはなはだよしといわれているのかということが問題とされており、それに対してアウグスティヌスは次のように答えている。「実際神による個々の作品が思慮ある人々によって考察されるならばそれら個々のものが各々の種に従ってたてられるところの賞賛すべき尺度・数・秩序を有していることがわかる。ではすべてのものを一緒にしたら、すなわち個々の作品が一なるものに向かって集まっていくことによって成り立つところの全体 (*universitas*) とするならばどれほど賞賛すべきであろうか。実際部分から成り立つ全体の美は部分としてよりも全体として一層賞賛に値するものであるのだから」¹⁶⁾。この箇所では個

々の被造物は一なる全体に向かって集まるべきいわば部分として解されている。そして個々の被造物がそのようなあり方をするために全体としてははなはだよしといわれるのである。では被造物が一なる全体に向かう部分であるとは如何なることか、それはあたかもそれ自体不完全な個々の被造物が申し分のない何か一つの異なる被造物になるというような意味で全体の部分としてあるのではない。又個々のものがちょうど一つの生命を有する身体の一部になるというような意味で全体の部分をなしているのではない。

そうではなく個々の被造物が全体に向かう部分であるとは、各々の本性を保持したまま各々の場所に向かうというそのことにおいて全体の部分をなしているのである。ではこのことを我々はどのように理解したらよいのだろうか。思うに個々の被造物は時には他の被造物から働きかけられまた時には他の被造物に働きかけることによって、すなわち相互に働きあいながら各々の場所へ向かうのである¹⁷⁾。

決して他の被造物から切り離され孤立的に自己の場所に向かうのではないのである。このことから個々の被造物が全体の部分であるというのは各々の場所に向かうということが全被造物の相互の働きあいの中で必要不可欠な役割を担った一部分をなしていると解されることになる。

IV

そこで最後に被造物の善が限度と形象の二者によってではなく秩序を加えた三者によって捉えられていることの意味を考えてみたいと思う。秩序は先に述べたように各々の固有の場所へ向かう志向性を意味している。しかしもし固有の場所へ向かうこの性質が神の側からの一方的な働きによるものであるならば秩序を被造的善の一特質としてあげることは不適當であろう。またもしこの性質が被造物の側からの働きとして重視されるとしても互いに異なった個々の被造物が他のものと無関係に、いわば孤立無縁な仕方では各々の固有の場所に向かうのであれば、秩序の有する全体性の意味は十分に説明することは出来ないであろう。このことから被造物の善が限度・形象・秩序の三者によって捉えられるとき、我々は本性的に互いに異なりながら相互に働きあうことによって各々の固有の場所へ向かう被造物のあり方のうちに善が捉えられていたことを知るのである。

存在するものはすべて善であるという言表は悪は存在しないという結論を容易に導

き出す故にこの世界にはびこる悪の事実によって一掃される危険を有している。被造物が存在するというをそれ自体極めて静的な事態と捉えたり、またその運動性を認めるとしても神のいわばあやつり人形のように一方的な働きに応じるにすぎないものとして捉える場合にはその危険はぬぐいされないであろう。

このような存在の理解からは被造物の側から悪が生ずることを説明することは不可能だからである。

被造物の存在というとき、個々の被造物が神の働きを受けながらも各々の本性に従った固有の働きを行ないつつ相互に働きあうものとして捉えられるとき、悪というものは各々の本性に基づいた働き乃至は働きあいを欠いた被造物の事態として始めて理解されるのではないかと思われる¹⁸⁾。

存在するものはすべて善であるという立場を出発点として被造物の善を限度・形象・秩序の三つによって規定することによって、神の支配統御の働きを根本的に受けながらも各々の固有の本性に即した仕方でも相互に働きあう被造物のあり方のうちに善が捉えられると同時に、神が被造物に対して申し分のない仕方で働きかけているという事実を何ら損うことなく、本性に即した働き、働きあいを欠いた被造物の事態という側面から悪の問題を考察する道が開かれたということが出来るだろう。

註

- 1) もっとも善悪二元論を唱えるマニ教に属していた若きアウグスティヌスにとってこの立場にたつことは極めて困難なことであったといわなければならない。
- 2) 『善の本性』は存在するものは善であるという立場にしっかりとたちながらマニ教を反駁する意図をもって悪の問題にとりくんだアウグスティヌスの50歳頃の著作である。
- 3) *De natura boni*, 1, 1.
- 4) *ibid.*, 3, 3.
- 5) *De Genesi ad litteram*, IV. 3, 7~6, 14, 特に3, 7である。この箇所は『善の本性』と比較的近い時期に書かれたと思われる。
- 6) アウグスティヌスにおける『智恵の書』11.21の引用については、A. M. La Bonnardière, *BIBLIA AUGUSTINIANA A. T., Le Livre de la Sagesse*, p. 295, 296, Paris, 1970 を参照。また同箇所における尺度・数・重さの意味については W. Beierwaltes, *Augustins Interpretation von Sapientia 11. 21* *Revue des Études Augustiniennes* XV1-2 p. 51-61, Paris, 1969を参照。

- 7) 尺度・数・重さを単に神の働きとするだけでなく各々に父・子・聖霊の働きを付せると主張する人もいる。Olivier du Roy, *L'intelligence de la foi en la Trinité selon Saint Augustin* p. 297- 281, Paris, 1966.
- 8) 創造主は自ら変化することなく被造物に変化を与えるという意味で不変的なのであり他方被造物は根本的に神によって変化を与えられるという意味で可変的なのである。
- 9) 例えば *De Trinitate* III. 8. 15 ですべての被造物について modus, numerus, pondus という語が使われたすぐあとの III. 9. 18 では同じく被造物について mensura, numerus, pondus という語が用いられている。
- 10) 例えば *De Genesi ad litteram imperfectus liber*, I. 10. 33 では形を有することと区別されることが密接な関係にあることがいわれている。
- 11) 重さが場所に向かうことに関わっていることについては, *Enarrationes in Psalmos* XXIX. 2. 10, *Confessiones*, XIII. 9. 10 等を参照。
- 12) *De natura boni*, 5. 5.
- 13) *De fide et symbolo*, 2. 2 を参照。
- 14) *De quaestionibus* 83, Q6, Q10 を参照。
- 15) *De Genesi ad litteram*, IV. 3. 7.
- 16) *De Genesi contra Manichaeos*, I. 21. 32.
- 17) 認識作用の事例としては例えば *De Trinitate* XI. 4. 7, XI. 11. 18 をあげることが出来る。
- 18) 『善の本性』において悪は限度・形象・秩序の欠如として捉えられている。